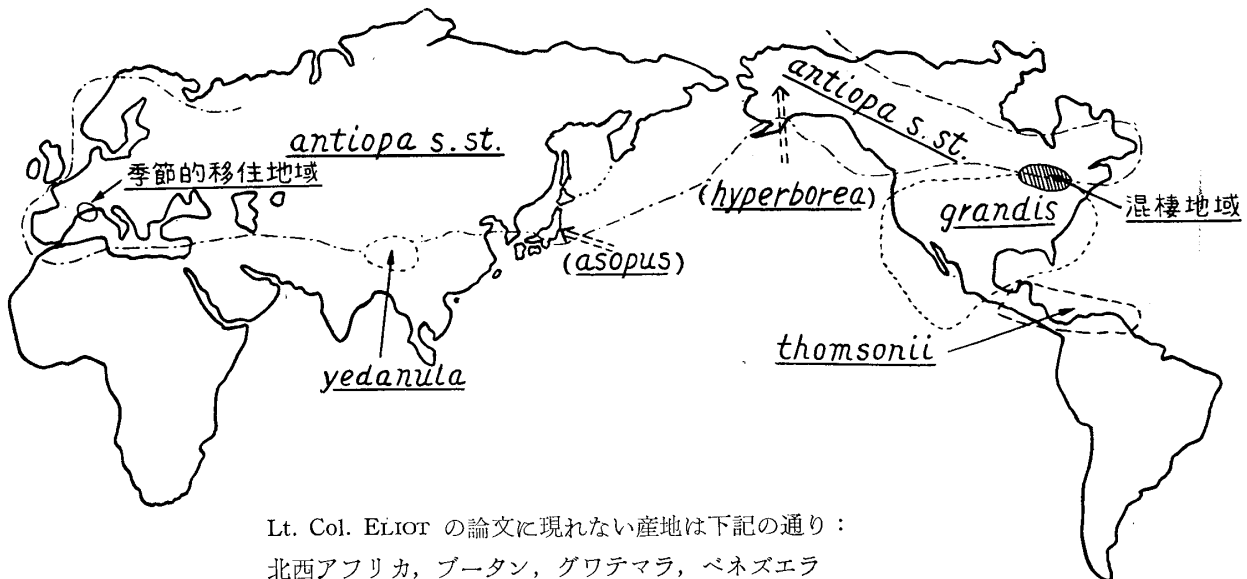
キベリタテハに関する知見

高倉忠博[1)]

Some Information on the Camberwell Beauty, *Nymphalis antiopa.*

By TADAHIRO TAKAKURA

世界のキベリタテハ分布図

Lt. Col. ELIOT の論文に現れない産地は下記の通り：
北西アフリカ，ブータン，グワテマラ，ベネズエラ

キベリタテハ (*Nymphalis antiopa*) は日本では中部以東の本州山地と，北海道に産する年1回発生の蝶であり，その習性・周年経過は他のタテハ類と似た点が多い．

一方，この蝶の世界における分布を見ると，旧北区の温帯・亜寒帯に広く分布し，西北アフリカにも産する．更に，アラスカを経て新北区にも広い分布を示し，旧北区と異って遙かに南下して中米グワテマラ，オンドゥーラスの山地やベネズエラの高地にさえも分布することが知られている（地図参照）．

然しながら，このように珍しく広大な地域にわたって産する「キベリタテハ」と呼ばれる蝶を，それぞれの地域で採れた成虫の標本だけに頼って分類して，簡単に亜種を云々してよいものであろうか．この問題について，主として生態・生活史の面から根本的に考えねばならぬとする意見の論文が，英国の昆虫雑誌 "The Entomologist" (Vol. 89, No. 1122, Nov., '56) に出ているので，簡単にその要旨を紹介したいと思う．

1）東京都武蔵野市吉祥寺1900

その論文は同誌270—277頁に掲載されており，筆者は英国の退役陸軍中佐 N. ELIOT 氏である．所で，本論に入る前に触れておきたいが，彼は同雑誌 (Vol. 88, No. 1103, Apr. '55) に，"Nymphalis antiopa on the Côte d'Azur" と題して，彼が住んでいる南仏地中海岸附近のキベリタテハの季節的移動について述べている．こちらの方の論文も，単に興味深いばかりでなく，後にとり上げる彼の研究とも関聯するので，手短かに内容を説明する．

イギリス本国では，その昔から，甚だ稀な蝶としてキベリタテハは尊重されて来た．そして，イギリス特産の個体は，キベリならぬ白い翅縁をもっていると信ぜられた時代があった．然し，今世紀になってからこの事は否定され，英国での記録はスカンディナヴィア半島からの移住個体 (Migrants) のものであると考えられた．すなわち，同じタテハ科のアタランタアカタテハ (*Vanessa atalanta*) や，ヒメアカタテハ (*V. cardui*) のように，海上を飛んで英国に渡るものとされた．ところが戦後，「英国で稀に目撃，採集されるキベリタテハは決してそのようにして移住，すなわち海を

飛んで来るのではなく，スカンディナヴィア半島から坑木を積んで来る船にまぎれて連れて来られるのである」との極めて有力な説が L. H. NEWMAN 氏によって発表された．更に彼は Entomologist 誌（Vol. 88, 25-27,'55）に，自説を裏書するものとして，スカンディナヴィア半島では，この蝶は移住性を有しないし，恐らくヨーロッパの他所でもこの蝶は移住性がないであろうと述べた．

さて，ELIOT 中佐は，NEWMAN 氏の意見には大体賛成であるが，たゞ，この蝶がヨーロッパで移住性を示すような地域はないと考えるのは早急であるとし，前述の南仏での観察により，当地では移住が季節的に行われているらしいと述べているのである．彼は，*N. polychloros*（仮称オオヒオドシ）とキベリタテハとの出現時期の比較等から次の如き結論を下している．すなわち，この地方へ向けて，越冬から覚めた成虫が越冬に適当な低温地帯である背後のフランス・アルプスから，3月から4月へかけて移住をはじめ，海岸に近い暖い場所で繁殖する．そして，6月上旬—7月上旬（日本より甚しく早い！）に成虫が羽化し，間もなくフランス・アルプスへ（恐らく，乾燥高温の盛夏の気候を避けて）戻り，そこで活動し，越冬し，翌年春に再び彼等の生れ故郷へ舞戻るのである，と．

前置きが大変長くなったが，次に ELIOT 中佐の最近の論文に入ることにする．彼の今度の論文は "The Strange Case of the Camberwell Beauty" という標題であり，世界のキベリタテハの分類についての意見を述べている．彼の今度の着眼点は，越冬後の個体に見られる翅縁の白化である．彼はこの現象が，越冬中の新陳代謝低下に関係ある生理的なものであろうとの推論を下している．彼は7頁半の論文のうち，この「黄白」変化に殆ど4頁を費しているのであるが，こゝでは要点のみに止める．

この越冬後の翅縁白化は旧北区産のものには例外なく起るのである．すなわち，欧亜大陸産の *N. antiopa antiopa*，東南チベット・西南シナ産の *N. a. yedanula*，日本産の *N. a. asopus*（SEITZ には *asopos* とある）などが挙げられるが，これらは皆年1回発生である．ところで，アラスカからカナダの大部分へかけて，矢張り1化性のものが分布している（アラスカ産のものに SEITZ は *hyperborea* と亜種名をつけているが，これは大英博物館でも米国でも認められていないようであると ELIOT 中佐は述べている）．ELIOT 中佐は，この種の蝶の翅縁が越冬後に白化するかどうかは明かにしていないが，彼の書きぶりより察するに恐らくそれらのものも白化するのであろうと思われる．然るに非常に興味深いことに，カナダ・北米の国境附近を境に，それから南に「2化性」のキベリタテハが産するのである．これらは春先に越冬から出て来て，第1化が暖い地方では5—6月に早くも発生し，次いで第2化が秋までに出るのである．出現時期は場所によって一定しないが，いずれにせよ2化性であることは疑ない．これらの型に対して *N. a. grandis* EHRMANN の亜種名が与えられてはいるが，*N. a. hyperborea* 同様余り認められていないと ELIOT 中佐は言っている．

この2化性もしくは多化性のものは，遙か南，メキシコ・シティー（北回帰線より更に南！）のあたりにまで見られるが，それらの個体は互に殆ど区別出来ない程，南北の差が少いそうである．更に南下して，中南米の山地（南米の記録はベネズエラ）に，ずっと大型で黄色の翅縁の幅広い，*N. a. thomsonii* という亜種が産する．

こゝで特筆すべきことは，この2化性のものでは，（我国におけるシータテハのごとく）第2化の個体が越冬するのであるが，越冬後の蝶には決して翅縁の白化が認められないという事実である．合衆国北部では無論完全な越冬の状態に入るが，南部のカリフォルニアの海岸に近いところでは，（丁度表日本の温和な地方のアカタテハのように）真冬でも特に暖い日などには飛ぶ個体もあるというが，両者のいずれも常に真正の「キベリ」である．また，この2化性の型の北上群と，アラスカ・カナダ系の1化性（恐らく越冬後に翅縁白化が認められるもの）の南下群は，東部国境附近のオンタリオ，ヒューロン湖近くのカナダ領で混棲地帯を形成するという．

以上が ELIOT 中佐の論文の要点であるが，次に彼自身の Summary を訳出しておく．

1）*N. a. antiopa* という亜種名は，アラスカ，カナダから東へ向ってヨーロッパ，シベリア，蒙古を経て日本まで分布する1化性の型に対して受入れられるべきであり，これの1分派が東南チベット，東部ヒマラヤ，中支西部に産する *N. a. yedanula* FRUHSTORFER である．

2）亜種名 *N. a. grandis* EHRMANN は，合衆国北部からメキシコへかけて分布する2化性の型に対して受入れられるべきであり，この型の1分派が中米に

産する *N. a. thomsonii* BUTLER である．

このように ELIOT 中佐は提案している．

さて，日本ではキベリタテハの生活史は未だ連続的には発表されていないし，その越冬の時期及び条件，翅縁の白化（これはスジボソヤマキチョウの越冬後の個体に見られる汚染現象と併せて研究するとよいと思う），成虫の発生地と採集された地点との関係すなわち羽化後の移動など，多くの点についての研究は未だ殆ど緒についていない様であるので，この文が何かの示唆ともなれば幸である．

終りに参考文献その他で御手数を煩わした磐瀬先生に厚く御礼申上げる．

主要文献

FIELD, W. D.: Kansas の蝶，1938
CLARK, A. H.: District of Columbia の蝶，1932
SEITZ, A.: 印度・オーストラリア篇
COMSTOCK, J. A.: カリフォルニアの蝶，1927
Entomologist: Vol. 88.

日本鱗翅学会会報〃蝶と蛾〃
日本鱗翅学会
大阪市東区今橋3丁目18　緒方病院内
振替口座京都15914番　電話北浜(23)3255 代
1957年3月15日

Published by
The Lepidopterological Society of Japan
c/o OGATA HOSPITAL, No. 18, 3-chome,
Imabashi, Higashiku, Osaka, Japan.
15. March, 1957